鋼殻のレギオス　　天剣を携えし刀姫

ルオト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鋼殻のレギオス　　天剣を携えし刀姫

【Ｎコード】
Ｎ７７２４Ｙ

【作者名】
ルオト

【あらすじ】
少女はただ守りたかった。大切な人達を。大切な故郷を。
だが、その願いは、嫉妬と悪意によって閉ざされ、少女は故郷を去り、遠き異郷の地へと旅立つ。
遠き異郷の地は存亡の危機だった。少女は刀を取り、その地を守護することを決意する。
その決意が導く結果は・・・・・・

プロローグ

変えたのはたくましい背中の青年だった。
少女は共に暮らす家族の中で自分だけが、特別な扱いをされるのが嫌だった。
そんな中、たまたま出会った青年が少女にこう言った。
「今は甘えとけ。そんで、いつか家族にその恩を返せるように強くなって、護ってやればいい。外をうろつく化け物や心無い人間からな」
青年の言葉は少女を強くした。
本当は少女は闘う事が好きではなかった。
人は勿論、外を王者のごとく君臨する人類の天敵である汚染獣もどちらも怖かった。
だけど少女は懸命に刀を握った。
大切な人達を守りたかった。
大切な人達が暮らす都市を守りたかった。
少女は懸命に走り続け、いつの間にか都市でも最高位の武芸者の称号を得ていた。
だが・・・・・・・少女とは無縁のことがら。嫉妬と悪意によってある事件が起き、少女は生まれ育った故郷を一時離れる事を選択する。
少女の家族は勿論、多くの人達が少女を止めたが、少女は周囲の制止を聞き入れず仮初の新天地を目指す。

「ん。もう直ぐ着くのか」
茶色の髪を腰まで伸ばした少女は放浪バスから見える都市の旗を

見て、自然と微笑を浮かべる。
その笑みは純粋な幼さと、どこか達観した大人の雰囲気が混ざり合っていた。
学園都市・ツェルニ。今日から少女の暮らす都市だ。
少女はこれから始まる新たな生活に、期待と不安が押し寄せてくる。
「六年か。長いよね。でも愚痴は言えないね。自分で選んで自分で決めた事だから」
少女は改めて自らの行動によってこの都市に来る事になった経緯を思い出すと、改めて決意する。
その日から少女レイムリア・サイハーデンの新たな生活が幕を開ける

プロローグ（後書き）

とある二時作品に影響を受け、鋼殻のレギオスの二時作品に挑戦する事にしました。

正直、原作の面白さを損なわない作品にできるか不安ですが、駄文ながらに付き合ってくれると幸いです。

第一話　ツェニルの支配者との対談

（・・・・・・私、どうしてこんな所にいるんだろう？）

レイムリアはひどく自分が場違いな場にいる事を認識しながら、やや緊張した面持ちで目の前に座る青年と向き合っていた。

銀色の髪に知的なメガネの青年カリアン・ロス生徒会長。

この学園都市の支配者に当たる人物だ。

レイムリアがここに呼ばれたのは、入学式での乱闘騒ぎの所為だ。敵対する都市同士の武芸者が鉢合わせになり、あわや大混乱になるのをレイムリアが問題の二人を投げ飛ばして、それを止めたのだ。

当初レイムリアはその騒ぎを静観するつもりだった。入学式そうそうに要らぬ注目を集めるつもりは無かったからだ。

だが一人の一般女子生徒が突き飛ばされるのを見て気が変わった。そして原因の生徒二人を投げ飛ばし暴動を鎮圧してしまった。

そうしてこの場に連れてこられたレイムリアだったが、何故ここに連れてこられたのか全く見当がつかなかった。

「ふむ。レイムリア・サイハーデンさん。私は君を罰しようとしているわけではないよ。むしろ君に礼を言う為にここに呼んだよ」

「そうですか。だったらもう私には用事はありませんね。それでは失礼しま」

「まあ、待ちたまえ。君については少々調べさせてもらったよ。レイムリア・サイハーデン。希望は一般教養科。奨学金はDランク。就職先は機関掃除。

これで六年はつらいよ」

カリアンの問いは正しい。だがレイムリアにはお金が無かった。

本当は違う学科に行きたかったし、自分の時間を多く削られる就職もしたくないが、レイムリアは援助してくれるあても無く、さらに学力もとある事情であまり高くない。

今の待遇こそがレイムリアにとって現状望みうる最高の環境なの

だ。
「そうですけど、私の家は貧乏ですし、私自身あまり賢くもありません。これで六年頑張る以外には」
「そこで提案なんだが、武芸科に転科するつもりはないかい？それなら奨学金もＡランクに上げよう」
「え！？」
カリアンからの突然の提案は、レイムリアにとっては望外の提案だった。
武芸科に転科すれば、最低限の訓練ができる。そうすれば、自己鍛錬くらいは出来る。最低限実戦の勘をある程度、落とさずに済む。
さらに奨学金もＡランクとなれば、機関掃除のバイトもあまりする必要も無く鍛錬に、より身を置く事が出来る。
レイムリアとしては生徒会長が提案を撤回しないうちに、即決で決めたいのが本音だが、ここまでレイムリアにとっていい話だと、逆に裏がありそうなので、一応訊ねてみる。
「あの、どうしてこんないい待遇で私を武芸科に転科させてくれたんですか？私は一応一般科を希望したただの一年生ですよ？」
「そうだね、レイムリア・ヴォフシュティン・サイハーデンさん」
カリアンがその名を口にした瞬間、レイムリアの表情が消え、視線が刃のように鋭くなる。
「・・・・・・私の事を『知っている』なら、この善意は何かしらの報酬という事ですか？」
「・・・・・・・・そう、あからさまな物では無いよ。ただ君には武芸科に所属してもらって、ある事をしてもらいたいんだよ」
笑みを深めながらカリアンは、今年都市同士の戦争、都市対抗戦がある事、そしてツェルニには一敗でも敗北すれば、都市の命であるセルニウム鉱山を失う事を話した。
「なるほど、解りました。微力ながら都市存続の為に私の刃を振りわせてもらいます」

「そうか。引き受けてくれるのかい。ありがとう」
「構いません。ただ次からは妙な駆け引きや裏のある交渉は控えてください。私はその手の駆け引きが苦手です。率直に話してくれた方が、話しが速くて助かります」
「そうかい。解ったよ。次から君に頼みごとをする時は率直に協力を仰ぐ事にするよ」
「助かります。それと私の事はあまり言いふらさないでください。無用な注目は、その、好きでは、無いので・・・・」
　刃の様な鋭い視線が消え、どこか気恥ずかしそうにするレイムリア。その様子は先程までの他者を圧倒す武芸者の顔では無く、どこにでもいそうな普通の少女の顔その物だった。
　あまりのギャップに思わずカリアンは苦笑した。
「解った。約束させてもらうよ。それと早速で悪いが、ひとつ君に頼みがある」
「？何でしょう」
「なに、ある小隊に所属して欲しいのだよ」
「小隊？」
　カリアンは小隊について簡単に説明する。
　武芸科でも優秀な者達が、チームを組み、戦争時の中核となる為の部隊だという事を説明する。
「なるほど、それで私をその、小隊に？」
「ああ。君ほどの実力者だ。末端の兵より、小隊員でいてくれた方がこちらとしても作戦を立てやすい。さらにこちらとしても援助の口実になる」
「・・・・・・援助は別にいいですけど、そう言う事なら引き受けさせてもらいます。後でその小隊の人の所に行けばいいんですか？」
「いや、向こうから接触させるよ。では、これからよろしく頼むよ」
　カリアンはそう言うと、右手を差し出す。レイムリアは少し躊躇ったが、その手をキッチリと握り返した。

「ふう。予想以上にうまく話がまとまったな」
レイムリアが退出した後、カリアンは予想外に話し合いがスムーズに言った事に安堵したが。
「さすが、槍殻都市・グレンダンでも最強の十二人の一人だね。少し睨まれただけで、手の震えが止まらないとは・・・・・・」
そうカリアンはレイムリアの前では平静を装っていたが、睨まれた瞬間、一瞬気絶するのではと思うほどの圧力を感じた。
そして思う彼女、レイムリア・ヴォルフシュティン・サイハーデンという名の少女は、絶対に敵対できないと。
敵対したが最後、おそらく、ツェルニは彼女一人に滅ぼされるだろう。
現状は彼女が協力的なのが幸いして、幸先のいい関係が築ける土壌が出来た。
後は彼女に出来るだけの便宜をはかり、出来るだけこちら側にするだけだが・・・・・
「さて、彼女はどうすれば、こちら側に繋ぎとめられるかな」

第二話　出会い

早速武芸科の制服に着替えたレイムリアは、笑みを浮かべながら教室へと向かった。

（ん～いい出だしね。六年も訓練が出来ないのは、キツイと思ってた矢先に思わぬ申し出があったおかげで、不安が全部解消！）

レイムリアにとってカリアンの申し出は本当にありがたかった。

奨学金のアップに、訓練できる環境をくれたのだ。

レイムリアにとってそれは物凄く重要だったし、カリアンの頼みである都市を守る事も、レイムリアの信念から言えば、むしろこちらから力を貸すという内容だった。

つまりカリアンの提案はレイムリアにとっては、マイナスがホトンド無く、むしろプラスの要素が多い。

自然と笑みがこぼれてしまう。

唯一の懸念は小隊の事だ。正直な話、レイムリアは他人と共にチームを組んで戦う事がホトンド無かった。

だからチームを組んで戦う事に不安を感じるが、それも一つの経験になる。

それに、本番の試合以外の勝敗はそれほど重要ではない。

最悪、カリアンに頼んで本番の試合の時は、単独突撃を許可してもらえばいい。

つまり、レイムリアにとってはその程度の話だった。

「あ、やっぱり武芸科の人だったんだ」

栗色の髪を二つにくくった少女が嬉しげに声を上げる。

「さっきは一般教養科の制服を着ていたぞ。私は一般教養科の制服なんて持っていないぞ」

今度は長身の赤い髪の少女が不満そうに言う。

「え？あの、あなた達は？」

突然赤毛の少女に問い詰められ、困惑するレイムリア。

「あ、ああ、済まない。取り乱して。武芸科一年ナルキ・ゲニルだ」
「んで、私が、ミィフィ・ロッテン。一般教養科だよ。で、こっちに隠れてるのが・・・・」
ミィフィがナルキの陰に隠れるようにしていた三人目を前に出す。
「メイシェン・トリンデント。この子も一般教養科ね」
と隠れていたメイシェンの代わりに、ミィフィが紹介をする。
「ん？あ！」
メイシェンの顔を見てレイムリアは思い出す。あの新入生が暴動を起こしかけた時、突き飛ばされた一般教養科の生徒だ。
「そっか、無事だったのね。良かった。あの後、私、生徒会室に呼び出されたからあなたが怪我してないかとか、確認できなかったから気になってはいたのよ。
でもよかったわ。それにしても同じクラスか。凄い偶然だね」
レイムリアは満面の笑みを浮かべると、無意識にメイシェンの頭をなでた。
「！！・・・・・・・・・！！！」
なでられたメイシェンは、なにも言わず顔を真っ赤に染め、うつむいてしまった。
「？・・・・・・あ！ごめん。つい、その、馴れ馴れしかった？」
「・・・・いえ、大丈夫、です。さっきは、助けてくれて、ありがとうございます」
メイシェンは恥ずかしそうに言う。
その様子に少なくとも先程のレイムリアの態度を怒っている様子は無い。その事に深く安堵するレイムリア。
「ん。別に大したことは無いわ。あんな自分勝手な武芸者が一般の人達を傷つける行為が嫌いなだけ。だから、メイシェンさんも気にしないで」
レイムリアは笑みを浮かべながらそう言うと、メイシェンは顔をうつむかせたまま小さく頷いた。
その様子をミィフィもナルキもどこか嬉しそうに見ている。

そこで、レイムリアは自分がまだ名乗っていない事に気付き、慌てて名乗った。
「あ、ごめんなさい。まだ名乗ってなかったね。私はレイムリア・サイハーデン。元々は一般教養科だったけど、生徒会長さんが今回の事件を未然に防いでくれたお礼にっという事で、武芸科に転科したの」
簡潔な自己紹介に何故か三人は驚いた。
「転科？たったそれだけで？どうしてだ！？」
思わず驚きの声を上げるナルキ。
「んむむ。これは、何か、裏事情がありそうね」
妙に鋭い視線を向ける、ミィフィ。
「・・・・・・」
唯一メイシェンだけは何も言わなかったが、その目は明らかに、好奇心が見え隠れしている。
「えっと、その・・・・・」
とっさにうまく説明できなかったレイムリアは、その後三人に連れられ、喫茶店へと向かい詳しい話を聞かれる事となる。

「ふ～ん。つまりレイちゃんは、あのグレンダンで武芸者としてそれなりに強かったから特別待遇で、転科したって事」
ミィフィがパフェをつつきながら、レイムリアの説明を納得の表情で頷く。
「だが、あのグレンダンで武芸者としてそれなりに強く、しかも汚染獣とも戦ったんだろ？だったらなんで都市の外、学園都市に来たんだ？」
ナルキの真っ当な疑問にレイムリアは内心苦笑した。
そう、レイムリアは本来都市を出る必要などまったくなかった。
なのに都市を出たのは単なるワガママだ。

むしろ家族や陛下、それに何かと自分を慕ってくれる人々も最後は自分が都市を出る事を納得した。今考えると、とても不思議だ。
だが一部、納得できない人もいた。特にあの戦闘狂。彼はよく、「君と戦うとホント興奮するよ。レイムリア。僕だけのモノにならないかい？」などとフザケタ事をいつも言っているので、その度に思い切り手加減抜きの技を放ち、何度となく病院送りにしてやった。
あの戦闘狂も自分がいなければ少しは落ち着くだろう。と思ったが、
（・・・・・・なんか嫌な予感がしてきた。あの人、禁断症状が出て、ツェルニまで私と戦いに来ないでしょうね。もう少し入念にダメージを与えた方が良かったかしら？）
さらりと嫌な予感がしたが、あの怪我なら普通に二、三ヶ月は大人しくする筈だからまあ大丈夫だろうと、やや楽観的な結論で、自分を納得させると、ナルキの疑問に答える事にした。
「まあ、そんな大した事でも無いんだけど、故郷で少し、トラブルにあってね。少しい居づらくなったから、ほとぼりが冷めるのを待つついでに都市の外を見たくて、それでここに来たの」
「トラブル？どんな？故郷にいられなくなるトラブルって結構大事だよ！？」
「そうだな。多少の事でなら都市を出ようとは考えないからな」
「・・・・・・レイちゃん、大丈夫？」
三人の心配そうな表情に、レイムリアは慌てて、
「そんなに心配ないよ。むしろ居づらく感じたのは私だけだし、家族とか、知り合いとか、お世話になってる人達には、最後まで馬鹿な事はやめろって止められたくらいだったから」
そう言う。
実際家族である、孤児院の子供達には泣いて止められたし、幼馴染も半泣きで、「レイムリアが責任を感じる必要なんてないでしょ！！」と言ってくれた。
養父さんも、かなり渋い顔で引き留めてくれた。

他にもレイムリアがほかの都市に行く事を止めた人間は多い。
一部例外として、戦闘馬鹿なとある人物は自分の絶好の鍛錬相手が六年もいなくなる事を阻止すべく実力行使してきたが、きっちり病院送りにしておいた。
「ま、という訳でそんな気にしないで。たったの六年よ。六年後はちゃんと故郷に帰れるから特に問題ないわ」
レイムリアの気楽な言葉に、三人も表情を和らげる。
その後四人でたわいない談笑をしていると、
「あの・・・・・すみません。レイムリア・サイハーデンさんは、あなたですか？」
突然声をかけられ慌てて声の主を見てレイムリアは驚いた。銀髪の小柄で綺麗な少女だったからだ。
「あ、これは先輩。レイムリアに何か？」
ナルキの発言で、レイムリアは目の前の少女の剣帯の色が自分達と違う事に気付き、少女が上級生、しかも武芸科だという事に気がついた。
「用事があります。ついて来てください」
「そうですか。解りました。ごめんね、三人とも。また明日ね」
レイムリアはそう言うと代金をテーブルに置き、銀髪の少女について行った。

銀髪の少女に案内されて場所はやや古びれた会館だった。
その一室で、やや目つきの鋭い金髪の少女・第一七小隊の隊長二ーナ・アントークがレイムリアに対し小隊について（カリアンがした説明より詳しく）説明した。
「さて、レイムリア・サイハーデン。小隊について理解したか？」
「ええ。まあ。それで、アントーク先輩はなんで、わざわざ私みたいな一年にそんな事を説明してくれたんですか？」

カリアンから事前に説明されているレイムリアだったが、初対面でどういう性格かまるで分らない二ーナとい先輩を少しでも知るため、あえてとぼけて訊ねてみた。
「ぷはははは」
寝転がり様子を見ていた、やはり上級生の男子生徒が突然笑い声を上げる　。
「シャーニッド先輩！」
「いや、二ーナお前が悪い。お前がもって回った言い方するから、この可愛い新入生に上手くとぼけらたんだよ」
上級生の男子生徒は立ちあがり、レイムリアに近づく。
「初めまして。武芸科四年のシャーニッド・エリプトンだ。この小隊では狙撃手を担当してる。暇な時のデートの相手はいつでも誘ってくれ」
「はぁ。どうも」
初めて接するタイプに、レイムリアは若干困惑の声を上げる。
シャーニッドの軽い言葉で、話がそれた事を感じた二ーナは、咳ばらいをし、話しを元に戻す事にした。
「さて単刀直入に言う。レイムリア・サイハーデン。私は君を第一七小隊の隊員に任命する。拒否は」
「いいですよ。引き受けます」
二ーナのセリフを遮るように、レイムリアは承諾の返事をする。
二ーナは勿論、シャーニッドも銀髪の少女も驚いたようにレイムリアを見る。
「・・・・・・・ずいぶんと簡単に承諾するんだな。どういうつもりだ？」
「特に拒否する理由がありません。それに、私自身武芸は好きですから、訓練できる環境が整うなら、特に問題はありません」
レイムリアの言葉に二ーナは少しだけ感心するような視線を向け、すぐに元の鋭い視線でレイムリアを見る。
「そうか。ではお前がわが隊のどのポジションに相応しいかテスト

を行う。好きな武器を取れ」
　二ーナがそう言うと、ツナギを着た少年が簡易武器の束を運んできた。
　ツナギの少年の持ってきた武器の束の中からレイムリアは、早速目的のモノを探すが。
（・・・・・・さすがに刀剣の種類はそれなりにあるみたいだけど、なんで肝心の刀が無いの！？）
　レイムリアが納めたサイハーデンの技は刀でこそ真価を発揮する。特にレイムリアがサイハーデンの刀技を改良した、レイムリアのオリジナルの技は刀でないと十分な力が出せないが、無い物ねだりしても仕方が無いと、レイムリアは深い溜息と共に諦め、普段握る刀と同じ重さ程度の剣を使う事に決めた。
「さて準備はいいか？ではいくぞ！」
　二ーナは両手に鉄鞭を握ると、いきなりレイムリアに突っ込んできた。
　レイムリアは二ーナの双鉄鞭を剣でさばきながら、二ーナの実力を確認すると同時に、慣れない剣での戦闘になれる為に、剣を振るう。

　二ーナの攻撃をさばきながら、レイムリアは何とも複雑な気分になった。
　二ーナの実力は、悪くは無い。
　グレンダンのレベルで考えるならば、少なくとも武芸者を名乗る事ができるレベルだ。
　だが横で見ているシャーニッドが、レイムリアが二ーナの攻撃をさばいている事に驚いた事に、レイムリアは驚いた。
　この程度の攻撃など、グレンダンでは武芸者を名乗るなら防げて当然だ。
　それに、レイムリアから言わせれば、今の自分の動きは酷くぎこちなく、正直知人が見たら、何をふざけているんだ！と怒られるよ

うな無様なモノだ。
そんな動きを見て驚いている時点で、ツェルニの武芸者のレベルがグレンダンに比べてかなり低い事が判る。
（・・・・・・・・生徒会長が私に協力を求めてきた理由が少しわかったわ）
これからの事を考えるとレイムリアはかなり頭の痛くなるが、対照的に二ーナはかなり満足げな表情を浮かべている。
大方一年にしては強いと喜んでいるのだろう。
その事もレイムリアにとっては頭痛の種だ。
これだけ打ちこんでいれば普通は気付くはずだ、レイムリアが試験とやらが始まってから、ずっと受けに徹している事に。
レイムリアがその気になれば一瞬で勝つ事も、攻守を逆転させることも可能だが、二ーナの実力を見る為に全ての攻撃を受けているから今の状況が成立するのだ。
つまりレイムリアは思い切り手を抜いて戦っている。ある意味屈辱的な状況であるはずなのに、喜んでいる二ーナがある意味哀れになる。
（・・・・・・・さて、どうしよう）
レイムリアは真剣に悩んだ。
勝つ方法など、パッと考えただけで、十以上はある。
どの方法で勝ってもあまり気分がいい勝ち方では無い。
ならレイムリアは自分なりの敬意を表す方法で勝つことにした。
つまり、自分が編み出した刀技。
本来なら二ーナに使う必要さえ無いモノだ。
実際グレンダンにいた頃も、並みの相手には使用さえしなかったモノだ。
レイムリアは使うと決めた瞬間、今まで受け続けていた二ーナの鉄鞭をかわし、ほんのわずかな？間？を作った。
そのわずかな瞬間にレイムリアは構える。
剣を腰に構え態勢を低くする。居合、または抜刀といわれる刀剣

技の構え。
　初めてレイムリアが今までにない構えを見せた事に二ーナは笑みを深め、レイムリアに向かって突っ込んできた。
　だがもし、この二ーナの行動をグレンダンでのレイムリアを知る者が見たら、無謀と評するか、無知と評するだろう。
　この構えをとったレイムリアが、どれだけ恐ろしいかをグレンダンに住む武芸者は何度となく見ているから・・・・・
　レイムリアは剣を抜刀した。その距離は剣の間合いでは無い。
　だが風さえも斬るかのような神速の抜刀の放った、衝撃波が二ーナに直撃。
　二ーナは堪えきれずに、そのまま壁に直撃し意識を刈り取られた。
（・・・・・失敗ね。やっぱり刀じゃないと全然遅いね。それに？アレ？が無いからさらに遅いし、威力も無い。は～）
　レイムリアは先程自分が放った技が本来のそれに比べると、見るに堪えないモノだった事に凄まじく不満を感じた。
　レイムリアが放った技。本来のそれは、剣線を見ることさえ不可能とされる技だ。
　事実、グレンダンでもこの技を防ぐ事が出来る者はいても、放たれたこの技をかわした者はいまだ一人もいない程の絶技だ。
　流連刀舞・『閃刃』
　レイムリアが編み出した技（命名はほぼ、知人が行った）は、その全てがサイハーデンの理念である『生き残る事』をレイムリアなりに解釈し、とある知識をもとに編み出された技だ。
　生き残る事・・・・・・すなわち相手がどんな攻撃をしようとも、どんな頑強であろうとも、相手より速く一撃で斬る。
　事実レイムリアはこの技で数多くの汚染獣を一撃で斬り倒して来た。
　そんな一撃を不完全で衝撃波だけとはいえ、直撃したのだ。未熟な武芸者である二ーナが意識を失うのは仕方が無いだろう。
　と、そこでレイムリアは周囲の視線に気付いた。ツナギの少年も

シャーニッドという名の先輩も、レイムリアをここに連れてきた銀髪の少女も皆、唖然としていたからだ。
（・・・・・・・もしかして、やり過ぎたのかな？えっと、まぁ、この場は仕方が無いよね）
レイムリアはそう自己弁護すると慌てて、
「これで試験は終わりですね。あ、私、明日の準備があるんでこれで今日は失礼します。さようなら」
と、何とも演技くさいセリフを残して脱兎のごとくその場を去った。

こうしてレイムリアの長い学園生活初日は終わりを告げた。

第二話　出会い（後書き）

今回の話で、出てくる戦闘狂さんは天剣持ちのあの人です。
この話では彼とレイムリアの付き合いはそれなりに深い設定になっています。
いずれ過去編を掲載すると思いますが、彼はの事は多分かなりノリノリで暴れさせるつもりです。

第三話　動き出す日々

二ーナはどこか苛立った雰囲気で廊下を歩く。
すれ違う生徒も皆おびえたように二ーナを見るが、今の二ーナにはそんなこと気にならなかった。
目的の場所に着くと、二ーナはノックもせず、問答無用で扉をあけると、怒鳴るように訊ねた。
「会長！彼女、レイムリア・サイハーデンは一体何者ですか！？」
「・・・・ノックもせずに入室して、いきなりなんだい。二ーナ・アントーク」
部屋の主、カリアンは二ーナの怒気をまるで気にした様子は無く、いつも通りの笑みを浮かべていた。
「先程レイムリアを小隊員に相応しいか、テストを行いました」
「で？どうだったんだい、彼女は？」
「・・・・・最初は会長の推薦通り鍛えれば、立派に小隊員が務められると考えました。ですが彼女のレベルはそんな物ではありません！彼女は現時点で小隊員を十分務められます。いえ、おそらく彼女は・・・・・・ツェルニで一番強い武芸者です」
二ーナ自身そんな事は本来認めたくないのだろう。どこか納得のいかない雰囲気がある。
だがそれでも、レイムリアが最後に見せた一撃。
あれは断じて未熟者の技では無い。
努力に努力を重ねて習得した技だ。
そしてそんな見事な技を習得した者が、二ーナの攻撃をただ防いでいた。
最初はあの技だけが彼女の優れた部分なのだとも思ったが、よくよく思い出せばレイムリアが二ーナの攻撃をさばいていた時の動きには見覚えがあった。
幼い頃、二ーナを相手に父が稽古をつけている時のさばき方に似

ていた。
　そのことに思い至り、二ーナは愕然とした。二ーナはレイムリアを試しているつもりだったが、実際は逆で、二ーナがあの一年生の少女に試されていたのだ。
　二ーナのプライドは傷つけられ、行き場の無い怒りが二ーナの胸に渦巻いている。
「・・・・・・・確かに彼女レイムリア・サイハーデンは武芸に関してはただの一年生では無い。それに君の見立て通り彼女はツェルニで一番強い武芸者だろうね」
　カリアンは溜息と共に、二ーナの主張を認めた。
「だが、君にとってはその事は関係ないはずだね？君は元々小隊に入れるレベルの生徒を求めていた。そしてそれが、未熟な一年生では無く、規格外に強い一年生だったとしても君にとってはそう悪い話ではないと思うが・・・・・」
　カリアンの言葉に二ーナは反論の言葉を言えなかった。
　実際に二ーナが率いる第十七小隊は定員が足らず、おまけに上級生からの風当たりも強い為、人員の確保が困難だった。
　そこに現れたのがレイムリアだった。
　彼女なら即戦力に、いや第十七小隊の軸になる可能性が高い。だが・・・・・
「・・・・・何故彼女はこの学園都市に来たのです？しかも本来なら彼女は一般教養科、武芸とは縁遠い立場だった筈だ。もしかしたら彼女は自分の都市を追放でもされたのですか？」
　二ーナの懸念はそこだった。初対面で感じたレイムリアという少女の印象は何処にでもいる普通の少女。
　その印象が強かったが、話すと、それだけでは無い深みというものがあった。
　そしてその深みはあの技を見て一層強くなった。あれほどの技を身に付けた武芸者が、都市を出る事などそうそう許される筈が無い。
　未熟者だが名家の二ーナでさえ半ば家出の形で、自分の故郷を出

たのだ。
ならあれほどの実力を持つレイムリアは？普通なら都市の外、学園都市に来る事など出来ないだろう。
それこそ都市の権力者や周囲の人々に止められるはずだ。
だがもし彼女が犯罪を犯し、半ば追放されたのなら？
そしてそんな人物を強いというからといって、小隊に入れる事は二ーナには出来ない。
だが二ーナの懸念をカリアンは苦笑しながら否定した。
「君の懸念は解ったが、心配はいらないよ。彼女は武芸者として信頼が置ける。それに彼女が都市を出る事になった経緯についても、こちらは把握している。もっとも私個人からはその事を君に話すつもりはないがね」
「何故です！？」
「これは、彼女のプライバシーだよ。他人である私が軽々しく君に話すのは、彼女に悪いからね。どうしても知りたいなら彼女から直接聞くといい」
カリアンは冷たく拒絶するように言うと、二ーナもこれ以上カリアンから情報を引き出せないと思い、無言で退出した。
二ーナのいなくなった会長室で、カリアンは小さく溜息を吐きだし、一枚の書類を見る。
レイムリア・サイハーデンに関する調査資料だ。
これを見た時、カリアンは正直彼女を利用する事に躊躇いを覚えた。
レイムリアは武芸者としては最強に近い能力を持っているが、武芸者として真面目すぎるうえに、優しすぎる。
だから彼女は都市を出た。
そんな少女を利用しようとする自分に、都市の現状にカリアンは妙な苛立ちを感じるしかなかった。

次の日の放課後、レイムリアは早速第十七小隊の使う練習場に足を運んだ。
昨日はごたごたしていたのでまともに挨拶も出来なかったが、あの銀髪の先輩や、ツナギの先輩にもきちんと挨拶をしなくては。
その一方隊長である二ーナに会うのは少し気が重かった。
絶対に昨日の手加減を見抜かれているだろう。
(気が重いな〜あの先輩プライド高そうだし、絶対、怒ってる。もしかして後で呼び出されて、校舎裏で集団暴行とかしてこないよね)
もしそうなったとしても、レイムリアなら三秒で返り討ちに出来るが、正直そんな陰湿な事をされると、気分が悪くなりそうだ。
少し気分が悪くなったので、レイムリアはとりあえず気分を切り替える為、誰もいない練習場に行き錬金鋼を取り出した。
グレンダンで使用していた自分専用の錬金鋼だ。
だがその形は普通のモノとは明らかに異質だ。青石錬金鋼を覆うように黒鋼錬金鋼が取り付けられている。
レイムリアはそれを構えると復元言語を口にする。
「レイストレーション」
復元された錬金鋼はやはり異質だった。
青石錬金鋼の柄に曲線を描くように取り付けられた黒鋼錬金鋼。
まるで二ーナの鉄鞭にも似ているが、二ーナの鉄鞭はレイムリアの様に曲線を描く形状ではない。
レイムリアはそれを腰に構えると、目を閉じ意識を内側に向ける。
心を済ませ、頸の循環を感じる。
たったそれだけでレイムリアの纏う空気が変わる。頸は外には漏れていないが、おそらくこの場に誰かがいたらその空気に圧倒されただろう。
静寂でありながら、まるで放たれれば刃の様な鋭さ。レイムリアの放つ空気は矛盾しながらも、見事に調和している。
と、そこで誰かの気配を感じ、レイムリアは構えを解く。

練習場を包む空気は消え、そこは普通の何の変哲もない一室に戻る。
「・・・・・・ずいぶんと熱心ですね」
入って来たのは昨日レイムリアを迎えに来た銀髪の先輩だった。
「あ、お早うございます。えっと・・・・」
「ああ、そうですね。まだ自己紹介もしていませんでした。二年のフェリ・ロスです。これからよろしく」
少女・フェリは表情を動かさず、淡々と自己紹介を終えた。
「え、あ、レイムリア・サイハーデンです。よろしくお願いします。ロス先輩」
レイムリアがそう言った途端、フェリの視線が何割か鋭くなる。
（え？え？？私、何か気に触るような事言った！？）
困惑するレイムリア。フェリはその様子に溜息を吐きだすと、
「出来れば名前で呼んでください。名字では兄と紛らわしいので」
「え？兄？・・・・・・ああ。もしかして生徒会長の」
「そうです。妹です」
フェリの返事にレイムリアは自然と納得する。確かに容姿が少し似ている。
「・・・・・・・貴女は、自分の才能をどう思っていますか？」
唐突なフェリの質問に、レイムリアは首をかしげた。
「貴女は故郷では最高位の武芸者だったのでしょ？武芸者である自分に疑問を感じた事は無いのですか？」
「疑問？ですか。特には、昔から武芸者として頑張ってきましたから」
「貴女は・・・・・・私とは違うのですね」
「？どういう意味ですか」
「私は自分の力が嫌いです。念威操者である自分が・・・・」
「嫌い、ですか・・・・・」
フェリの言葉は何となくだが、レイムリアも理解できる。幼い頃レイムリアも同じことを考えた。

武芸者である自分が嫌いだった。
だが今はそんな嫌悪感も無い。むしろ武芸者としての力は今では多くの人達を繋げる絆のように思っている。
だからレイムリアは何も言わず、しばらく無言の時間が過ぎた。

その後、ツナギの少年ハーレイがやって来るなり、レイムリアの持つ錬金鋼を見るなり好奇心丸出しの様子でレイムリアに訊ねる。
「あ、なにその錬金鋼！？」
「え、あ、これは故郷で使ってたものです。やっぱり錬金鋼は自分の手に馴染んだ物の方が使いやすいと思って」
「う～ん。確かにそうだろうけど、一応校則に引っかかるかもしれないから見せてくれるかな。て言うかなんで青石錬金鋼に黒鋼錬金鋼がくっついてるの！？」
ハーレイの疑問にレイムリアは無言で青石錬金鋼を抜いた。
抜かれた青石錬金鋼は刀の形状をしている事にハーレイは驚いた。
「なんで刀を黒鋼錬金鋼に入れてるの？」
「それは秘密です」
本当は説明してもいいのだが、長くなりそうなのであえてそう言った。
「ん～気になるから後でいいから、教えてね。では早速と」
ハーレイはそう言うと、早速レイムリアの二つの錬金鋼のパラメーターを見始めた。
見始めて絶句した。
「なにこの青石錬金鋼と黒鋼錬金鋼！？設定が二つもある！？」
ハーレイの驚きにレイムリアは小さく「あ」と言葉を漏らした。
すっかり忘れていたが、レイムリアは青石錬金鋼に刀以外にも鋼糸という鋼の糸という形状を記憶させている。
黒鋼錬金鋼にも刀を納める鞘の形状以外にも手甲の形状を記憶させている。

刀と鞘はレイムリアのメインの武器だが、状況次第で鋼糸と格闘術も使うので、この設定を加えている。
こんな設定をするよりは二つの錬金鋼を持った方が手間が少ないが、レイムリアはあえてこのスタイルをとおしている。
それにグレンダンにいた頃は常にこの設定だったので、その事をすっかり忘れていた。
「えっと、レイムリア。君って剣で戦うんだよね？」
「正確には刀です」
「なんで格闘戦専用の手甲や、鋼糸？って武器の設定を入れてるの？」
ハーレイの当然の疑問にレイムリアは苦笑しただけで何も答えなかった。
疑問を感じながらもハーレイはレイムリアの錬金鋼の設定のバックアップを取る。
その後、二ーナとシャーニッドが来たので簡単な訓練を行った後、その場は解散となった。
だがレイムリアは気になる事があった。二ーナの態度だ。
時折どこか探るような視線をレイムリアに向けてくる。
恐らく昨日生徒会長にレイムリアの事を聞きに行ったのだろう。
それで何かしらの情報を得た。
もっともレイムリア自身探られても困るような過去は、特にない。
だがこれから一緒に組んで戦うのに、そんな疑う視線を向けられるのは、正直あまり気分がいい物ではない。
（・・・・私、この小隊で上手くやってけるのかな？）
レイムリアは内心そう思うと深々と溜息を吐きだした。

第三話　動き出す日々（後書き）

レイムリアチート企画その一。格闘術を習得させました。
流派は勿論、某戦闘狂のあの方と、某小隊長さんが習得している流派です。
原作では、レイフォンも頸技だけは習得しているようなので、いっそ格闘術も習得させてみようと思いこのようにしました。
またサイハーデンは生き残る事を前提とした流派のようなので、他の武門の技を習得しても問題無さそうな気がしたのも理由です。
あともう一話くらい入れた後に、対抗戦の話を入れられたらと考えています。

第四話　バイトと約束

レイムリアが第十七小隊に所属して数日がたった。
訓練自体はレイムリアにとっては苦でも無く、むしろゆるいくらいに感じたが、新参者自分が口を出すのも気まずいので何も言わなかった。
また一つ気付いた事がある。
この第十七小隊。どうやらかなり癖がある。
まず念威操者のフェリ。
彼女の能力は高い。実際にその実力を見ていないが、感じる念威や送られてくる情報にはその実力が見え隠れしているが、本人がやる気が無いのか、明らかに手を抜いている事がレイムリアの目には明らかだった。
以前、才能の事を訊ねられたし、自分の力が嫌いだと言っていたことから、おそらく不本意な形で小隊にいるのだろう。
次　に狙撃手のシャーニッド。どの彼もあまりやる気が無い不真面目な部分があるが、訓練自体は真剣な事から、フェリとはまた違った理由からやる気が無いように思える。
また彼の動きはどうにもある種の癖を感じる。
その癖はどうにも二ーナとの訓練でついた物ではないように思う。
ここから先はレイムリアの勘だが、シャーニッドはたぶん癖がつくような連係を組んでいた仲間がいたのだろう。
卒業か、はたまた仲違で分かれたのかまではレイムリアにも解らないが、おそらくその事を彼はどこか引きずっているように思う。
そして隊長の二ーナ。
かなり真面目だが、どうにも熱くなりすぎて、周囲の様子が見えていない所がある。
新参者であるレイムリアから見ても、この癖だらけ、いわくだらけのメンバーしかいないのだ。連係を高めるなら互いの事情を理解

し、その上で訓練しなければせっかくの個々の高い能力を生かせる筈が無い。
数日しか行動を共にしていないレイムリアが気付く事を、隊長を名乗る二ーナが気付かないはずは無いはずだが、二ーナの性格から考えるとそこまで気がまわらない可能性もあるが・・・・・どちらにせよ、この小隊で活動するのは大変だと、レイムリアは改めて思う。

小隊の事を考えて表情が暗くなったレイムリアだが、気分を切り替える。今日は初めてのバイトだ。暗い顔ではこれからやっていけない。
笑顔を浮かべ第一声を口にする。
「いらっしゃいませ」

奨学金がAランクになったレイムリアだが、全くバイトをしない訳にはいかなかったが、重労働の機関掃除をするつもりも無かった。何か面白そうなバイトは無いかと探し始めた時、メイシェンが喫茶店でバイトをすると聞き、レイムリアも便乗する事にした。
理由はいたって単純。故郷のグレンダンではまず出来ない仕事だからだ。
まずどこの店も天剣授受者をウェイトレスとして雇う店はまずない。
雇ったとしても、今度はお客が緊張して商売にならないだろう。
天剣授受者がウェイトレスをする事などあり得ない事だが、このツェルニでなら当然のように出来るので、レイムリアはメイシェンと共にウェイトレスのバイトに励んでいた。
また、この喫茶店のケーキは絶品で、レイムリアもぜひレシピを教えてもらい、グレンダンの子供達にも食べさせてあげたいと思ったのもバイト先に選んだ理由だ。

という訳で、今もメイシェンと共にウェイトレスとしてお仕事をしていたが、
「やっほ～メイっち！レイちゃん！遊びに来たよ～」
「あ、ミィにナッキ。それに・・・・フェリ先輩！？しかも何で、縄でグルグル巻きに！？」
　驚愕の声を上げるレイムリア。
「捕まりました」
「だって～この間会った時からお話ししたかったんだもん」
　だからと言って、先輩、しかも生徒会長の妹を縄でグルグル巻きにするミィとナッキにレイムリアは絶句する事しかできなかった。

　バイトを終えたメイシェンとレイムリアはそのまま、ナルキとミィフィ。そしてフェリと共に夕食をとり、そのまま帰途へとついた。
「・・・・フェリ先輩。その私の友達がご迷惑をかけてすみません」
「いえ。楽しかったので」
　フェリはあまり表情を変えないので、迷惑だったかと考えていたレイムリアだったが、フェリがそう言うならそうなのだろう。
　ひそかに安堵するレイムリアだったが、突然フェリの髪が光りだして驚く。
「すみません。少々制御が甘くなりました」
（制御が甘くなった！？フェリ先輩が念威操者として凄いのは知ってたけど、ここまで凄いなんて・・・・・・もしグレンダンにいたら私の同僚になってたかも）
　驚くレイムリアに、フェリは真剣な表情で、
「これが、私が武芸科にいる理由です。兄は私の念威操者としての才能を勝利の為に利用するつもりで、私を武芸科に転科させました。
　私は兄を恨みます」
「・・・・・・・・」
　レイムリアにはフェリの気持ちが理解できなかった。

本当の意味で血の繋がった家族がいないし、家族に利用されるという事もレイムリアには想像さえできない事だ。
「・・・・・でも、貴女を見て少しわからなくなりました」
「？」
「貴女は、天才的な武芸者でありながら、普通の生活も送っている。今日の、バイトをしている姿を見て、貴女が羨ましくなりました」
「羨ましい、ですか？」
「ええ。自分の才能や環境に振り回されず、確かな自分で在り続けられる。私には出来ない事です」
フェリの言い回しは、レイムリアにとっては少々小難しく、あまり分からないが、何となく自分がどう言えばいいのかだけは分かった。
「フェリ先輩は真面目ですね」
「？・・・・・どういう意味ですか？」
「私はそんなに難しく考えませんでした。自分のしたい事をする。それ以外は特に考えた事はありません。武芸は好きだし、バイトでウェイトレスも楽しそうだからしているだけです。フェリ先輩みたいに、才能とか環境とかあんまり気にしませんでした。
そんな私だから、フェリ先輩の悩みに答えられるか分かりませんけど、言える事は一つです。もっと我儘になっていいんじゃないですか」
「・・・・・・我儘ですか？」
「ええ。もし念威操者としての自分が本気で嫌いで、何か違う事がしたいなら、私も力になります。アントーク先輩が何か言ってきたら、私が黙らせます。
でももし、嫌いでないなら、念威操者として頑張って、結果を出しながら好きな事を探せばいいと思いますよ。
結果さえ出せば、アントーク先輩も多少訓練をサボっても文句は言えませんから」
レイムリアの提案に、フェリは驚いた。

驚いて表情が少しだけ緩んだ。
「貴女は物凄く我儘なうえに、無茶苦茶ですね。どちらにしろ苦労するのは私なのにそんな事を言い出すなんて」
「え？そうですか？」
「ええ。でも、それもいいですね。ただ反抗するのも飽きてきました。次の対抗戦で貴女のサポートだけは少しだけ真剣にしてみるのもいいかもしれません」
「へ？私だけですか？」
「ええ。代わりに、そうですね。私のしたい事を探すのを手伝ってもらいます」
「え？えぇぇぇぇ！！」
「当然の対価です。そうですね。まずは女の子らしく料理に挑戦しましょう」
無表情ながらも、妙にやる気のフェリにレイムリアは何も言えなかったが、自然と苦笑した。
「そうだ。ならフェリ先輩。私の事はレムって呼んでください。故郷の親しい友人はみんなそう呼びます。だから先輩も」
「友人ですか・・・・・・分かりました。レム。なら私も呼び捨てにしてください。貴女だけ愛称で、私だけが先輩で呼ばれるのは不公平です」
「うッ！・・・・・・分かりました。フェリ」
「よろしい。次の対抗戦、少しだけ楽しみになりました」
少しだけ満足げなフェリに、レイムリアはこっそり苦笑した。

第四話　バイトと約束（後書き）

今回の話はレイムリアのバイトと、フェリとの友情を結ぶ話です。当初は機関掃除でもいいかなと思いましたが、それでは面白くないので、メイド！もとい、ウェイトレスのバイトにする事にしました。

またフェリのフラグも立てるエピソードも書かせていただきましたが、逆に二ーナのフラグを立てるエピソードがありません。別に二ーナを嫌っているのではないので、彼女にはもう少ししたら存分に活躍する場面を用意できたらと考えています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7724y/

鋼殻のレギオス　　天剣を携えし刀姫

2011年12月17日05時45分発行